

明暦二年丙申九月九日

大旦那豫州宇和庄永長郷。法花津清原朝臣清家金三郎信行

〔松の落葉〕大中臣藤井宿禰 松の屋

おのが家、藤井氏なることは、世々づたへきつる家の書、どもにも見えて、さだかなり、めうじはない、今の世には、おしなべて氏のほかに、めうじあれど、まれくには、かく氏のみなる家もありけり。

〔以人名爲苗字〕  
〔温知柳營秘鑑六〕本阿彌家の事

本阿彌家の元祖、妙本と云者也、本姓菅原氏也、松田を以名字とす、相州鎌倉に居住し、天性刀劍を上る術を得たり、足利將軍尊氏命に依て、京師に來る、鎌倉の松葉ヶ谷日靜上人は、尊氏の叔父也、是へ歸して法名を授られ、妙本阿彌と號す、是に依て、本光此業を用る、文明年中赤松氏有故に付て、將軍義教大に怒り、此ときに本阿彌清信を獄舎に入、時に日親上人と獄屋に入、互に獄舎の内にて被説し日親上人の説法に歸依し、其後二人ともに獄舎を出る、清信入道して、日親上人に法名を得て、本光と號す、元祖妙本此本光、何れも本字を付て、刀業に秀たる故に、松田と不號して、以來本阿彌氏と稱により、これより光の字を以て一族の冠字とす、今の三郎兵衛家也、

〔倭樂傳記二〕四座并喜多座の始等之事

觀世大夫は、伊賀の服部一黨の者也、足利將軍東山殿政<sup>○義</sup>に仕へて、觀阿彌と云同朋也、渠に仰て猿樂の業を學び始め勤しむ、其子世阿彌、其子音阿彌と續て、同朋にて是を相勸、其子俗にして、觀世三十郎と號し、猿樂と成て今春が聟<sup>ミ</sup>と成、いよ／＼藝術熟し、子孫相續す、

〔嘉永撰集類集三十八〕乍恐口上

一私名前、先年より御武鑑江相列候義に付、御尋に御座候、

此段私元祖は、近江國浪人佐々木五郎兵衛高三<sup>ツ</sup>と申<sup>○略</sup>、前書五郎兵衛高三病死後同人悴